

## 院生の言葉に教職大学院の学びの特質を見る！

宇都宮大学教職大学院2年生は、約1年半の大学院での学びを終えようとしています。今回は、教職大学院2年生によるふりかえりから、「教職大学院での学びとは何か」に迫っていきたくと考えています。

### ◆教職大学院2年生は何を手に入れたのか

教職大学院での学びは、「授業と長期実習」に大別することができます。授業では、教育の理論や最新事情等も学びますが、実践力を育むためのものの見方・考え方等も学びます。また、参加型の授業が中心で、そのほとんどが院生による能動的で協働的な学びとなっています。長期実習では、連携協力実習校での実践研究を行います。現職院生は、実習校でしか学べないスクールリーダーとして資質を、そして学卒院生は、有力な新人教員としての力量を手に入れることになります。さらには、長期実習についての丁寧なふりかえりとおして、理論と実践とをつなぐ授業も、毎週行っています。

今回はそのような学びを積み重ねてきた教職大学院2年生に、「教職大学院で身につけたこと、気づいたこと、出会ったこと等」という観点から、自分自身の学びを総括した短文を寄せてもらいました。言葉の端々から教職大学院における学びの輪郭が浮かび上がってきます。教職大学院の学びの特質に触れていただけたら幸いです。

大学院生名	教職大学院に来てよかったことは何か ～教職大学院での学びとは何か～
伊藤 昌夫 (現職院生)	自他の試行錯誤を伴った実践・省察について対話し、妥当性を協働探究できる関係性は、今後の実践を支える拠り所になっています。反省的实践家の概念で自己を問いつつ、広い視野で教育を考える機会を得ています。
大登 英樹 (現職院生)	新たな理論や様々な実践に触れ、これまでの殻を破り視野を広げることができます。さらに、学んだことをよき仲間とじっくりと語り合い、深く教育について考える中で、今後の自分を見出せます。
大類 仁 (現職院生)	専門的理論や他地区・諸外国の実践から経験を批判的に振り返り、教師自身が学ぶ専門家であるべきだと改めて感じています。多様な教育課題と子どもが中心である教育の本質を照合して考える機会となっています。
鎌田 大河 (学卒院生)	現職教員と学卒院生がともに2年間を歩んでいくスタイルです。現職の先生方とともに学ぶことで、それぞれの理論や実践から自分なりに省察し、実践的指導力を身につける手掛かりとなります。
紀 令子 (現職院生)	子ども一人一人の学びを保障する大切さ、よさを伸ばす多様な学び方の必要性等、多くの気づきがありました。連携協力実習校の先生方と共に子どもの学びに寄り添い、新たな実践に挑む貴重な時間も大きな財産です。
國井 朱美 (現職院生)	理論を元に、子どもの学びの姿を重視した授業を追究し、学校現場の姿を丁寧に読み解く中で、自己の省察力の深まりを感じています。教育を多面的・多角的に捉えるしなやかな視点が育ち、新たな知を創造しています。
小林 真也 (現職院生)	講義や、教育課程に特色のある全国の学校参観、仲間との対話を通して、広く自由に教育を考えることができるようになりました。また、自分との対話により、自己改革ができた経験も貴重でした。
澤田 慎一 (現職院生)	様々な学校の教室実践を手掛かりに、対話を通して、教育のあるべき姿を追究できます。授業という個別具体的で複雑な営みを、子どもの事実立脚して読み解くことで、省察的实践力が高まります。
鋪屋 佳子 (現職院生)	グローバルな視点から大胆に教育を観ることで、明日の世界を生きる子どもの教育のために我々教師がどう関わるべきかを教授や仲間そして連携協力実習校との対話を通してreflect&createする貴重な時間となっています。
鈴木 隆夫 (現職院生)	現代社会で求められている、「精神論」や「あるべき論」を超えた科学的な根拠(エビデンス)に基づく教育に対応する実践力を高めることができます。多様な子どもたちに寄り添う教育への理解を深めることもできます。
田島 文博 (現職院生)	学校現場と連携した実践研究と対話による省察を通して、授業づくりの面白さと難しさを実感する毎日です。「子ども主体の深い学び」という授業の本質を意識した授業デザインをめざしています。
藤浪 友美 (学卒院生)	教職大学院で現職の皆さんと共に学ぶことで、私の子ども観、授業観等を見つめ直すことができました。何より、現場に入る前に得た、大学や連携協力実習校、院生の先生方との結びつきが一番の収穫です。
星 義夫 (現職院生)	多くの学級と授業を参観しました。大学院の仲間と語り合い、大学の先生方から理論を学びました。これらの経験から、自分の授業観や教師観が変化しました。今後の教育に役立てることができます。
吉原 俊 (学卒院生)	講義や研修会、県内外の学校での授業観察を通して、子どもの姿を見取る視点を広げることができました。子ども一人一人が安心して学ぶことができるよう、教師としてできることを考え続けます。

## 「授業研究」

教育実践高度化専攻教授 日野 圭子

授業実践力を高めるために、私達は「授業研究」をします。授業研究は、明治時代に、当時は珍しかった一斉指導法を学ぶための授業参観に始まり、以来、我が国で100年以上の伝統を持つ研修の方法です。授業研究が、世界的に有名となった1つの契機は、1999年に出版された『Teaching Gap』(Stigler, J. W. & Hiebert, J. 著, The Free Press)でした。この本では、日本の子ども達が国際比較調査で成績が高いことの背景に、授業研究という日本流の学習指導改善の方式があることを、ある小学校のケーススタディを通して紹介しています。その後、授業研究についての様々な図書が出版されるとともに、授業研究の実際を学ぶために多くの教師や教育関係者が来日し、現在、その手法を取り入れた研修が国際的な広まりを見せ、国際学会が開催されたり雑誌で特集が組まれたりもしています。

授業研究は、以下の主要な活動から成立しています。

- (1) 子どもの学習や進展を目指した長期的なゴールを設定する
- (2) 特定の学習内容に対して、研究や観察に基づいて授業を計画し、実施する（研究授業の実施）
- (3) 授業中の子どもの学習や取り組みの様子を注意深く観察する
- (4) 授業後の協議会において、観察に基づいて議論をし、よりよい授業へと改善する

これらの活動を、教師が協働で行い、また、授業の参観や授業後の協議会を通して、他者からの視点を得ながら、よりよい授業実践に向けて不断に努力をしていくものです。

しかし、こうした活動が、ともすると形式化していくことも危惧されています。海外で授業研究を広めている日本の研究者達は、他国の取り組みを振り返る中で、授業研究における「教師による研究」の側面の重要性を指摘しています。また、上記の活動において、いかなるゴールを設定するかが特に重要であること、しかしこの部分が真剣に考えられずに進むことがあることも指摘しています。私達にとって、システムとして当たり前になりがちな授業研究ですが、その研修方法としての特徴を意識することで、教師一人ひとりの授業実践力を高めるための在り方を検討することが求められています。

### 《シリーズ:教職大学院授業紹介① 「特別な支援が必要な子どもへの理解と対応」(選択科目[前期])》

本授業では、主に通常の学級の特別支援教育について扱っています。支援を必要とする子どもたちを理解する視点を増やし、「支援」を単に方法としてではなく、多様な観点から考えることを目的としています。

発達障害の子どもや支援を必要とする子どもを多面的に理解するために、様々な資料を手がかりとします。発達障害の当事者によって書かれた文献やインタビュービデオからは本人の切実な困り感と同時に、その人たちの豊かな世界が伝わってきます。実際の授業ビデオからは、授業中での支援や配慮がどのように機能しているのかを、子どもの姿から読み取ることができます。また、知能検査のWISC-IVについても、実際に手に取って内容を知ることによって、結果が示すものが単なる数値ではなく、その子どもの困り感や強みなどを説明しうるものであることを実感してもらえればと考えています。

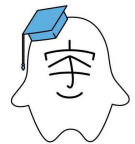
授業の後半では、受講者から提供してもらった事例の検討を行います。うまくいった事例だけでなく、うまくいか



ずに心残りがある事例も出てきます。それらの事例の中から「学ぶ」ことを重視しています。事例の報告者は、振り返ることで、その当時は気づかなかった視点を発見していきます。また、参加者全員で事例の検討をすることで、「自分が担任だったら」、「隣のクラスの先生が困っていたら」、「特別支援教育コーディネーターだったら」など様々な視点が出てきます。異なる校種の事例を聞くことで、どのような情報を学校間で共有できると有効なのかという話題になったりもしました。

障害のある人たちの当事者研究に取り組んでいる熊谷晋一郎さん(東京大学先端科学技術研究センター)は、「何か不協和が起きたときにこそ視野を広げて見ることは大事なんだと思います。」と述べています。「視野を広げ」て問題をとらえる力は、教育現場において今後ますます必要とされるのではないかと思います。

(司城紀代美)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻 (教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。